07379130

高等学校におけるJSL生徒の教科学習に資する教材の研究
－「リライト教材」開発と効果の検証－

教科・領域教育専攻
言語系コース（国語）
長谷川　千賀

指導教員　小野　由美子

Ⅰ　研究の目的

2007年９月現在、公立学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒は25,411人で、そのうち、高等学校に在籍する生徒は1,182人である（文部科学省，2008）。日本語が母語ではない生徒（以下、JSL(Japanese as Second Language)生徒）は第二言語である日本語によって教科学習を行なわなければならないが、指導する側に指導法や教材の蓄積がない。特に日本語指導を任されやすい国語科では、教科学習を念頭に置いたJSL生徒のための教材が必要である。そこで、本研究の目的と課題を以下のように定めた。

目的：高等学校におけるJSL生徒の教科学習に資する教材の開発

課題：

1．開発についての示唆を得るため、高等学校におけるJSL生徒の教科学習に関連する知見およびリライト教材に関する知見を得る。

2．リライト教材開発・改良の指針を得るため、リライト教材の理論的背景を探る。

3．高等学校国語科用リライト教材を開発し、授業に供して効果を検証する。

Ⅱ　論文の構成

序章　研究の概要

第１章　高等学校におけるJSL生徒の教科学習に関連する先行研究

第２章　リライト教材に関する先行研究

第３章　リライト教材の理論的背景の探究

第４章　高等学校国語科用リライト教材の開発

第５章　高等学校国語科用リライト教材の効果の検証

結章　本研究のまとめと今後の課題

Ⅲ　論文の概要

第１章では、高等学校におけるJSL生徒の教科学習に関連のある先行研究を概観した。第１節では、高等学校におけるJSL生徒の教科学習に関する研究が未開拓の領域で、高等学校の授業や日本語支援で使える教材が必要であることを確認した。第２節では、年少者日本語教育の代表的な指導法として、内容重視の指導法と「母語・日本語・教科」の統合的学習を取り上げ、学校教育における日本語指導の位置づけの示唆、バイリンガル生徒にとっての母語の重要性を確認した。第３節では、バイリンガル教育の主要な理論・観点を概観し、内容重視の指導法はバイリンガルであることがマイナスにならないレベルを目指した指導法であること、高等学校の現場を踏まえた場合、内容重視の指導法を主体にするのが現実的であることを確認した。

第２章では、リライト教材の開発者である光元聰江らの研究を検討し、リライト教材を高等学校で使用する適切性について考察した。第１節では、リライト教材の開発と実践に至る光元らの一連の研究を検討した。そして、リライト教材が小学

校教科書の分析に基づいてボトムアップ式に開発された教材であり、理論を応用してトップダウン式に開発された教材ではないこと、JSL児童生徒の成長の支援を目的とした「「教育」を核とした日本語教育」のための教材であり、高等学校の教科学習に資する教材として意義があること、小学校、中学校での実践研究はあるが、高等学校では行なわれていないことが明らかになった。第2節では、光元ら以外の研究を検討し、効果的な音読譜を作成するためには吟味が必要であるという示唆を得た。

第3章では、リライト教材を認知理論、第二言語習得論から検討し、背景となる理論を探った。第1節では、学習者にとって分かりやすくテキストを書き換えることは学習に効果をもたらすこと、テキストの内容を損なわず分かりやすく書き換えることが可能であることが分かった。第2節では、認知心理学で説明されている言語・文章の情報処理理論を概観した上で、リライト教材を「JSL児童・生徒の分かる表現に書き換え、音読譜で表記することにより、第一言語よりも情報処理効率が低い第二言語の情報処理効率を上げ、テキストによる教科学習の前提となる文の命題構成やテキストベースの構成をJSL生徒が行なえるようにする教材」と定義した。第3節では、光元らのリライト教材の実践研究で指摘されている効果を、第二言語習得論ではどのように捉えられるのかを確認した。

第4章では、高等学校国語科リライト教材の開発を行なった。第1節では開発対象を設定し、具体的なJSL生徒を決定した。第2項では、「羅生門」「舞姫」「この村が日本で一番」「「共生」とは何か」の4篇の教科書教材から、JSL生徒の日本語力に合わせたポイントリライト教材・リライト注釈付き教材・音読譜教材の3種類5篇のリライト教材を作成の過程を詳述した。この作成を通じ、リライト教材を含めた全体的な指導法の確立の模索とポイントリライト教材の作成法の検討が課題であることが明らかになった。第3節では、作成の実践から得た手順を整理し、リライト教材実作の手引きとしてまとめた。

第5章では、作成したリライト教材を授業に供し、その効果の検証を試みた。「使用者の評価」「授業の発言・応答の構造」「音読の特徴」の3つの観点から分析し、以下の諸点が確認できた。1）使用者は、リライト教材について、おおむね好意的評価を行なっている。2）リライト教材を主教材として用いた授業は、教科学習が行える可能性を示した。3）リライト教材の音読と教科書の音読とでは、リライト教材の音読では「不明を尋ねる」が有意に少なく、「誤読」の「生徒自身の訂正」が有意に多く、「訂正なし」が少ないことが有意傾向にあることが示された。

Ⅳ　今後の課題

①リライト教材を用いた指導実践の継続による国語教育と日本語教育の両立

リライト教材は高等学校の国語科で使用するに値する教材であり、これを用いた授業を継続して行い、日本語教育との両立を図る。

②リライト教材の作成法の追究と指導法確立の模索

リライト教材の種類、原教材のジャンル、JSL生徒の母語別の作成法探求やリライト教材を活かす授業計画の考案が必要である。

③リライト教材の普及と他教科・JNL生徒への応用

リライト教材の提供と実践例の共有が必要である。国語科以外の教科への応用、JNL生徒への応用も視野に入れる。